

福永勝也先生ご退職に際して思い出すこと

黒木雅子

福永先生と仕事以外でお話したことの一つに、アメリカ生活があります。毎日新聞社で報道に携わっておられた1983年、WPI(世界報道研究所)の日本代表フェローとして一年間、全米各地で取材されました。1980年代は、私もカリフォルニア州のサンフランシスコ湾の東側、イーストベイに住んでいたのです。なつかしく当時の話をすることがあります。先生のお家は大きな家々が並ぶオークランド・ヒルという丘の上。ヒルの縁を走る高速道路を車通学していたので、どんな人が住んでいるのだろうと思ったことがあります。私はダウンタウン近くのアパートに住んでいたのです。ニアミスにもならない話とはいえ、なつかしくローカルな話題を共有したことがあります。

先生からご著書『こんなアメリカを知っているか—社会内部の深層報告』サイマル出版会(1988)をいただきました。80年代のメディアで話題になった尊厳死、健康幻想、フェミニズム、アメリカ先住民、ゲイ・コミュニティ、原発事故、宇宙飛行士、エイズなどのテーマを通して、アメリカ社会の裏側が描かれています。そのなかに、デトロイト(いわゆるラスト・ベルトの一都市)で起こった中国系アメリカ人青年(ビンセント・チン)の撲殺事件の背景にある日米貿易摩擦について、デトロイトの地元紙に追求した箇所があります。この事件はアジア系および日系アメリカ人の歴史においては重要な人種差別事件でもあるのです。それから四半世紀以上たち、当時話題になった問題は忘れられているのではないかと思います。トランプ政権の現在からみるアメリカ社会の移り変わりとその軌跡を確認

させてくれるご著書です。

またご著書のなかで、私が時々見ていたニュース番組の花形アンカー・マン(最終的に原稿をまとめ、総合司会をする人)のテッド・コッペル氏たちとワシントンのABCスタジオで議論する写真に目がとまりました。今では、多くのテレビ局のニュース番組のアンカー・マン(パーソン)は人種と性別において多様になっているとはいえ、当時はちょうどアジア系女性が出はじめた頃でした。一方で私はというと、オークランド・トリビューンというローカルな日刊新聞の配達をしていました。場所と時期は近いものの、出会うことのなかった福永先生と京都学園大学で一緒に仕事をさせていだいたことに、ご縁のようなものを感じます。福永先生、これからもお元気で活躍ください。